
たぶん異世界トリップ

乙羽真維

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶん異世界トリップ

【Nコード】

N4972W

【作者名】

乙羽真維

【あらすじ】

成人一歩手前の女子大生。今日もごくごく普通の一日を過ごしたはずだったのに。大学の帰り道、自宅最寄駅で異世界トリップをしてしまったらしい。……たぶん。住んでいる世界ととてもよく似た、だけれど住んでいる人はほぼ人外。そんな世界へトリップした女の子の話。主人公が男装する為、ボーイスラフBL風に見えるシーンがあるかもしれませんが、苦手な方はご注意ください。

01・たぶん異世界トリップ

直ぐには異変に気付け無かった。いつもとは違う光景を認識してはいたけれど、「今日って何かのお祭りでもあったっけ？」程度にしか思わなかった。

大学の5限目の講義を終えた後、小腹が空いたからと友人とファーストフードに立ち寄って、ポテトとシェイクで程よく満たされたところに、最近彼氏が出来たばかりの友人の惚気話で少々胸焼け。いや、最初は聞いていて楽しかったのよ。でもさ、彼氏の居ない独り身の私にとっては少々糖度が濃すぎたというか。今が楽しい時だから友人も話したくて仕方がないのだろう。それに付き合っていたら、お店を出た時には外はもう暗くなっていた。長居し過ぎたとは思ったが、そんなこと珍しいことではない。何時には帰ろうね、なんて最初に決めてはいても、話が盛り上がって時間を過ぎていくことなんてしょっちゅうだ。

そう、取り立てて珍しいことはなかったし、ごくごく普通の日だった。

……そのはずだ。

「まいったな……」

自宅の最寄駅。ホームのベンチに腰を下ろす。

電車から降りた瞬間感じた違和感。見える景色はいつもと変わらない。だがホームに居る人々がいつもと異なっていた。……って人々って言うても良いのだろうか？ 人間……なんだよね？ 違うと

言われても困るのだが。

猫耳或いは犬耳、はたまたウサギ耳、要は獣耳に尻尾をつけた人々。耳と尻尾だけではなく、服から出ている素肌の部分もしっかり毛に覆われていて、顔も猫や犬になりきっている人々。白い羽やら黒い羽をつけた人々。死神が持つような鎌を携えている人々。勿論偽物だろうが……本物だったら銃刀法違反だしね。乗車する際に駅員によく止められなかったなと思ってみたり。とにかく、ここはこのコスプレ会場か！？　と言いたくなる光景。それにしても良く出来ている。質感が本物に近い。それにあからさまに衣装を纏っているという感はなくとても自然だ。本当に人間なんだよね？　というか人間であってくれ。

私と似た身なりの者もちろん居る。が、何故か皆異様に背が高い。コスプレしている人もしていない人も背が高い。私の身長は平均以下なので、彼らと並ぶとかなりの身長差だ。同じ女性でも頭二つ分ぐらいは軽く差がある。私と同じぐらいの身長の者も居ないことはないのだけれど、目につくのは髭を豊かにたくわえた男性ばかり。ファンタジー物に出てくるアレだ。ドワーフなイメージ。どうやら私が出来そうなコスプレは、この状況ではドワーフが有力か？

……いや、しませんから、コスプレ。

最初何かのお祭りかとも思ったけれど、そんなイベントがあるなんて話は聞いていない。

アニメ発祥の地とか、萌えを提供するお店があるわけではない、住宅街がメインの駅。

ホームに降り立って呆然とすること30分。ベンチに座って更に30分。流石にこの状況が楽しいイベントではないことには気付い

ている。認めたくないだけで。

ちらりとベンチ脇の看板を見遣る。

「闇が峰なんて知らないし」

ベンチ脇の駅名が記されている看板には『闇が峰』の文字。私が利用している最寄駅名は『光が峰』であって、『闇が峰』なんて駅は知らない。

万が一駅名まで変える様な大掛かりなイベントを開催していたとしても、事前に告知されるだろうし、注意書きも目立つところにあるはずだ。それらが無いのだから、今私が居るここは『光が峰』ではなく『闇が峰』で正しいのだろう。

友人と別れて、乗った電車はいつもと変わらなかった。帰宅する乗客で混んでいた車内では、座ることなくずっと立っていたので寝過ごして違う駅に着いてしまったということもない。そもそも私が利用していた沿線で『闇が峰』という駅は存在しない。

ホームに降りた瞬間、この『闇が峰』に迷い込んでしまった……のだろう。

これがいきなり森の中とか、海の上とかだったりすれば「瞬間移動？ それとも異世界トリップ？」とかいう思考に直ぐに辿り着けたものの、なまじ駅の風景が『光が峰』と同じものだから俄かには信じがたい。

しかしここが『光が峰』でないことは事実。そして『闇が峰』であることも事実。

携帯は勿論圏外。果たして私が持っている定期で改札から出られ

るのか。出られなくて精算することになった場合、私が持っているお金は使えるのか。

改札を無事出られたとしても、どこに帰れば良いのだろうか？ まずは自宅があるはずの方面に向かうつもりではいるけれど。そこに家族が居る可能性はかなりかなり低い。

となると……………。

「おとーさん、おかーさん、ついでにサトシ……………」

急に心細くなった。どうやったら自宅のある『光が峰』に帰れるのか分らない。すぐに帰れるのか。それともずっとこのままなのか。それは嫌だ。時々ウザく感じることもあるけれど、やっぱり家族の元に帰りたい。

あつ、ちなみにサトシは弟の名前。ついででゴメン。だって最近ちよつと生意気なんだもの。昔は「おねーちゃん」って片時も離れずくつついていたくせに。弟のくせに可愛くない。弟だから可愛くないのか？ …… まあ今はどっちでも良い。可愛くなくても、サトシは私にとって大事な家族であることには代わりないのだから。

家族を思い出したら余計に心細くなったのか、鼻の奥がツーンとして目に涙が集まってきた。やばい。こんな公共の場で泣くのは恥ずかしい。咄嗟に俯き、ギュツと目を閉じて泣きそうになるのをやり過ぐす。

そして俯いたまま目を開けると、紳士物の黒の皮靴が目に入った。こちらを窺う視線を感じる。恐る恐る顔を上げれば、黒髪で西洋風の顔立ちをした男性と目が合った。

「随分長いことそこに居るが、もしかして迷子か？」

「ち、違っ」

いや違くありません。思いつきり迷子です。が、この歳で迷子と言うのは恥ずかしくて思わず否定してしまった。ここは素直に迷子を認めて助けを求めるべきところだっただろうに。

「では捨てヒューマンか？」

「……は？」

「ヒューマンなのだろ？」

ヒューマン……人間であることは認めるが、それって確かめるようなこと？ それに『捨て』って聞き捨てならない言葉がついていたのは気のせいかな？

「ヒューマンでここまで魔力があるのは珍しいな。だからってまだこんなに小さな子を捨てるとは赦しがたい」

やっぱりさっきの『捨て』は気のせいではないのか。捨てられたのではない。現状を把握しきれてはいないが、十中八九迷子だ。「あなたのおうちはどこですか？」と聞かれても答えられない迷子だ。住所は言えるが、恐らくこの世界には存在しない住所で、それでも

ってここからの帰り道が分からない迷子だ。

それに小さい子呼ばわりされているけれど、只今19歳。童顔ではないつもりだが、平均以下の身長のせいで、実年齢よりも下に見られることはある。でも小さな子呼ばわりされる程下に見られたことはない。……が、ここ『闇が峰』の背の高い人々の中では、子供扱いされても仕方ないのかもしれない。非常に不本意だが。

そういえば捨てるとか小さな子供とか以上に、もっと聞き捨てならない単語があったよね。『魔力』って何？ そんな物持った覚え全くないのだけれど。とういか、ここは『魔力』なる物が存在する世界ってこと？ あーこれは異世界トリップ確定？

「名前は？ 俺はクロード。お前は？」

「……マコト」

「マコトか。よし、俺が拾ってやろう」

「は……い……？」

差し出された右手に、流されるまま自分の右手を重ねるが……。ちよ、ちよっと待った！ これで契約成立とか言われたら困る。捨てられたわけじゃないんだから拾ってくれるな。

「今から俺が主だ。宜しくな、マコト」

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは名前しか知らない男に拾われてしまいました。来年成人を迎える女性としてこれで良いんでしょうかね？

02・ご主人様

ズズツ……と、音を出すのは行儀が悪いかと思いつつ、1時間半前飲んだ物と同じバナシエイクを口に運ぶ。

違う物を頼めば良かったかなと頭の片隅で思ったが、体が糖分を欲していたので後悔は無い。うん、甘い物って落ち着く。

本日2度目のファーストフード店。1度目と違うのは、場所は大学近くではなく、自宅の最寄駅もどきの闇が峰の駅ビル内。そして私の目の前に座っているのは、友人ではなくクロードと名乗った男性。ちなみに彼が飲んでいるのはホットコーヒー。砂糖とミルクを使う友人とは対照的に彼はブラックだ。

私を拾うと言ったクロードさん。流されるがまま連れて行かれては堪らないと、「きちんと自己紹介したい」と言ってここに連れこんだ。名前しか知らない男性に、どこまで事情を曝け出しても良いものか迷ったが、捨てられたという誤解だけは解いておかねばならない。そうでないとな本当に拾われてしまうのだから。

ちなみに定期券は案の定使えなかった。しかし私が持っていたお金で精算は出来たので無事改札から出ることが出来た。どうやら通貨は私の世界と同じらしい。そのことにはホッとしたが、あまり所持金が残っていない今の状況は安心出来ない。

まあそんなお財布都合で、選んだ店がファーストフードだったのだが。そんな私の事情を知ってか知らずか、シエイクの代金は彼が支払ってくれた。「マコトはまだ子供なんだし素直に甘えなさい」だって。

そういえば駅の改札での精算でも彼が支払おうとしていたの思い出す。あの時は私が自分の持っているお金を使ってみたいと駄々

こねて押し切ったのだが……。精算をしている時、クロードさんと何故か駅員さんまでもが、小さい子供の初めてのおつかいを見守るかのような瞳で見えていたのが非常に気になる。いったい私はいくつの子供に見られてるんだろうか。問うてみたいが敢えてそこは聞いていない。逆に年齢を問われることもしていないので言っていない。実年齢を誤解されている節はあるが、この誤解を解くのは今は保留。ほら、幼く見られていた方が有利なこともあるかもしれないでしょ？ とりあえず今の優先事項は捨てヒューマンではないという誤解を解くこと。

「マコトは異世界……こちらで言う、256エリアから来たという訳か」

誤解を解くにあたり、闇が峰の人間ではなく、光が峰から来た旨を伝えた。電車から降りたら、光が峰ではなく闇が峰だったと。

結果、意外にあつさりと話を信じてくれ、そしてこちらの世界のことを少しだけ知ることが出来た。

こちらの世界では、異世界渡りは珍しいことではないそうだ。あの程度の魔力を保持している者ならば、誰でも出来るとのこと。とはいえ人間はそれに相当しない。基本、人は魔力を保持しない。基本と条件つけたのは、最近魔力を保持する人間も増えてきたから。

こちらの世界に初めて人が訪れたのは、もう何千年も昔のこと。異世界渡りをしたこちらの者が、人間をペットとして連れて帰ってきたのが始まりだそうだ。大昔は、捨て犬、捨て猫同様、捨てられる人間も居たのだとか。何て酷い話だ。

しかしここ数百年で、ペット（人間）は家族の一員という考え方が広まり、捨てられる者もだいぶ減ったとのこと。そしてここ数十

年では、人を伴侶に選ぶ者も増えてきており、その夫婦から産まれた子供達は、人間の遺伝子を強く引継いだ子でも、多少の魔力を持っているそうだと。とは言うものの、異世界渡りをするだけの魔力を保持する人間の子はそうそう居ないらしい。

クロードさんは相手の魔力をある程度見ることが出来るそうだと、私の魔力を見てもらったところ、異世界渡りをするだけの魔力を保持していることが分かった。

「もしかして、マコトのご両親どちらかが、こちらの人間なのか？」

「い、いや……違うと思います」

異世界渡りが珍しくないことと同様、こちらの者が私が居た世界に移住することも珍しくないらしい。特に私が居た世界……こちらでは256エリアと呼ばれている世界は、こちらと言語と環境がほぼ同じだそうで、初めて異世界渡りをする者や移住を希望している者に人気のエリアとのこと。

知らないだけで、ご近所の人や友人、更にもっと身近な家族が、実はこちらの者だったりするのかもしれない。

まさか、お父さんかお母さんのどちらかが……。

いやいや、それはないだろう。今までそんな素振り見せたこと無いし、もし魔力なんて持っていたとしたら自慢しちやいそうな親なもの。

でも敵を欺くにはまず味方からと、異世界人であることを隠すために私にも隠していた可能性だってある。

うーん、これは考えても答えが出ないので一先ず保留。

「で、捨てヒューマンでないことは分かって頂けたでしょうか？」

「ああ。勘違いして悪かったな」

うん。誤解が解けてめでたしめでたし。

「だが帰れないんでは、この後どうする？」

「うつ……」

そうなのだ。異世界渡りをするだけの魔力はある。だけれど魔力があるだけでは異世界渡りは出来ない。

クロードさんに魔力量を見てもらった時、私に異世界渡りをするだけの魔力があったから偶々何かの拍子にこっちに来ちゃったのかな？ 魔力があれば誰でも異世界渡りを出来るっていう話だし、簡単に元の世界に帰れるんじゃない？ と思った。

異世界渡りをするには魔力を用いなければならない。魔力を使用する際、呪文なり魔方陣なりが必要となるそうだ。それが人によって違うとのこと。無詠唱で魔力を使う者も居れば、魔方陣も呪文も必須な人も居る。クロードさん曰く、魔力の使用はイメージ。呪文や魔方陣はあくまでイメージを明確にし現象化させる為の手段。別に呪文や魔方陣で無くても、上手くイメージを湧かせられるのであれば、スキップでも大声で笑うとかでも何だって構わないらしい。

私もこちらの世界に来た際に、魔力を用いる為の何かをしたはず……なのだそうだが。その感覚を思い出せば元の世界に帰れるだろうとクロードさんは教えてくれたのだが。

……全くもってそんな記憶は無い。

だって気付いたら闇が峰の駅に居たんだもの。いつも通り、普通に電車からホームに降りただけだ。特別なことをした覚えは無い。

今回の私みたいに、無自覚に魔力を用いる者も居るらしい。主に小さな子供。無自覚に魔力を使い転移して迷子になる子も居るんだとか。ただそういう事故を防ぐ為に、幼い内から魔力の使い方は練習させられるらしい。

魔力が無いとされている世界で生活していた私は、勿論そんな練習なぞしていない。魔力の使い方に関して言えば、私は幼児と一緒に魔力の使い方が分からないので、元の世界に帰れないのだ。

「とりあえず、俺の所に居候するか？ 空いている部屋はあるし、マコトが帰れるようになる日まで居ても構わないぞ」

こちらの世界で行く当てはない。だからと言ってすぐに帰れそうもない。ホテルに宿泊するだけのお金は……残念ながら持ち合わせていない。となれば、誰かに頼るしか術はなさそうだ。

「……クロードさんの所にお邪魔させてもらっても良いんですか？」

「ああ。元々拾うつもりだったのだし。生活費も面倒見てやるから安心しろ」

よし、ここは素直に甘えちゃおう。

「クロードさん、暫くの間宜しくお願いします」

「ああ。改めて今から俺がマコトの主だな。宜しく」

ん？ ……あれ？ もしかして捨てヒューマン扱いの時と状況あんまり変わってない？

捨てヒューマンの誤解は解けたけれども、クロードさんが主人になることには変わらない訳で……。

「ご主人様？」

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは『ご主人様』とお呼びする相手が出来ました。帰るまでの期間限定ですが。

「あんな、マコト。俺のことはクロードで構わないぞ」

あっ、そうですか。

03・時には嘘も必要です

「おいどうした？ 遠慮せず入れ」

現在クロードさん宅前。立ち止まったまま動かない私をクロードさんが玄関に入るよう促すが、驚き過ぎて足が動かない。

ファーストフード店で、クロードさんの所に居候させてもらうことが決まった後、駅ビルで夕食の惣菜など簡単に買い物を済ませクロードさん宅へ。

駅ホームだけでなく、駅ビル内も街の様子も、私が利用していた光が峰とそっくりだなと周りを観察しつつ歩いていたら……。恐ろしい程クロードさん宅までの道程が、私が良く知っている道程と同じで。『まさか……まさか……』と思ったらそのまさかだった。

住み慣れた我が家！ ……と全く同じ外観の家。そこがクロードさんの家だった。

「マコト？」

間抜けにもぼーっと口を開けていた自覚は少なからずある。そしてそれを不審そうに見ているクロードさんの視線も何となく気付いてはいる。でもね、驚いたんだから仕方ないじゃない。

だからといって、ずっと立ち止まっている訳にもいくまい。驚きはしたものの、好都合ではないかと自分に言い聞かせて玄関へ向かう。暫くここでお世話になるのだ。だったら自分が居た世界と出来るだけ近い方が、生活がしやすいに違いない。ここだったら駅まで

の間、迷子になることもないし。

「お邪魔します」

物が置かれていない玄関。良く言えばとても片付いた、悪く言えば殺風景……そんな玄関。

我が家とは違う。私より先に帰っているであろう、サトシの踵を踏み潰したスニーカーはここには無い。下駄箱上に飾られている、お父さんが気に入っている小さな絵画もここには無い。お母さんが毎朝水をあげている、玄関外の鉢植えもここには無い。そして家族四人の名前が記された表札は勿論ある訳が無かった。

とても良く似ているのに、ここは異世界なのだ。……と、今更だけれど実感が湧いてきて、ほんの少し寂しくなった。

「先に部屋を決めておいた方が良いか」

と案内されたのは二階。リビングやキッチン、バスルーム等共用スペースは一階。個室は二階にある。外観だけでなく、中の間取りも我が家と一緒にだ。

空いている部屋だったらどの部屋を使っても良いとのことなので、階段上って直ぐの左側の扉を「ここが良い」と指差す。そこは我が家では私が使っている部屋。

しかし残念なことに、その部屋はクロードさんが使っているとの

こと。「奥の部屋が広いぞ」とクロードさんは勧めてくれたが、そんなことは百も承知。我が家では両親が寝室に使っている部屋だ。家族が居るのならともかく、クロードさん一人で生活しているようなのに……広い部屋を使用していないことが不思議。

「マコトが左の部屋が良いなら、俺が部屋を移るが」

「いやいやいや結構です。右の部屋使わせて頂きます」

こちらは居候の身だ。クロードさんに部屋を移ってもらうだなんてとんでもない。それに居候が一番広い部屋を使うのも変な話だ。右側の部屋、我が家ではサトシが使っている部屋を使わせてもらうことに決めた。

とは言え、クロードさんが何故左の部屋を使っているのか気になったので尋ねてみたら、単に階段に近いからという理由だけだった。歩く距離が短い方が良いからだ。……もしかするとクロードさんは横着な性格なのかもしれない。

「じゃあ次は一階、キッチンやトイレ、風呂の場所を案内するよ」

恐らく私が知っている間取りと同じはずだろうが、案内してもらうことにする。万が一ということもあるし。

階段下りた目の前がリビングダイニングキッチン。玄関同様、物はありません。置かれておらず、リビングには大きめのソファが一つ。ダイニングに四人がけのテーブルと椅子。その程度しか置かれてい

ない。

廊下の途中にトイレ。そして廊下奥がバスルーム。やはり間取りは我が家と一緒にだ。

最後に案内されたバスルームで、クロードさんが手にしていた袋を手渡される。駅ビルで買い物した時の袋だ。

「俺は夕飯の支度をするから、その間にマコトは風呂を済ませておくの良い」

「夕飯の支度をするんだったら、自分も！」

支度と言っても、惣菜を買ってきたからあまりすることは無いと思うが。とはいえクロードさん一人に押し付ける訳にはいかない。それに家主より先に風呂を使わせてもらうのは気がひける。

「今日は初めての異世界渡りで疲れただろう。支度は俺がしておくからマコトはゆっくり体を休めなさい。着替えはその袋の中に入っている」

駅ビルで食べ物以外の売り場にも立ち寄ったが、てっきりクロードさんの物を購入しているんだと思ったら、どうやら私の着替えを購入してくれたいらしい。何て気が利くのだろうと袋の中を見て……固まった。

「えっと、これ……」

袋の中にはルームウェアと下着。その中から下着……パンツを取り出す。

「ああ、そのキャラクター、最近子供の間で流行っているヒーローらしいんだが。マコトはこちらに来たばかりだから知らないよな。うつかりしていた、すまない。他のキャラクターにすれば良かったな」

キャラクターがプリントされたパンツ。実はこのキャラクターは知っている。私の世界でもこのキャラクターは存在するから。って問題はそこでは無い。私が手にしているのは明らかに子供用の下着……と、これも不本意だが今は問題では無い。実年齢より幼く見られているのは承知しているから。問題なのは、この下着が男児用だということ。そう、女性用の下着ではなく、男性用の下着なのだ。

「マコトが男の子で良かったよ。女の子の物は良く分からないからな」

どうやら私、男の子だと思われている模様。誤解されていたのが捨てヒューマンと実年齢だけだと思っていたのに、性別までも勘違いされていたとは。男だと間違われるのは正直凹むけれども、実は元居た世界でもあったこと。普段パンツスタイルが多く、髪もショート。何より女性らしい凹凸が無い体型のせいで、男性に間違えら

れることは少なくなかった。

とはいえ、この勘違いは不味い気がする。年齢は聞かれるまで黙っていいように思っているけれど、流石に性別は明かしておいた方がよいよね？一緒に生活するのだ。性別を誤解されたままでは生活しにくい。

「あの、私……」

「まあ女の子だったなら居候させようとは思わなかったけれどな」

私、女です……と言いかけた言葉を飲み込む。

そ、そうだよ。いくら子供と勘違いされているとはいえ、男女が二人つきり、一つ屋根の下で暮らすというのは問題有り……だよ。私だって全く危機感が無かった訳ではないのよ。でもこっちの世界で行く当ても無ければ、ホテル生活するだけのお金も持ち合わせていなかったのだし。

ここは女だっということに黙っておくべき？ いやでも……。暫しの困惑は、クロードさんの一言でいともあっさり終結した。

「女は苦手だ」

そう言ったクロードさんの声は、元々低音ボイスであるのに更に低く、地を這うかのごとく低く低く。深海に引きずり込まれたかのような息苦しさに背中に嫌な汗が伝った。恐る恐るクロードさんを窺えば、眉間に皺を寄せ、切れ長の目がつり上がり怖い表情になっている。

相当女性が苦手らしい。いや苦手というレベルでは済まなさそうだな。目の前に女性が居たら、容赦なく排除しそうな雰囲気だ。うん、はつきり言おう。今更「女でした」と間違っても言えない。怖くて言えない。私の生存本能が「女だと言つな」と訴えている。

「マコト？」

まだ低さは残るものの、元の声に戻ったクロードさんに呼ばれてドキリとする。

「あの……男で良かったです」

「そうだな」

「お言葉に甘えて、先にお風呂お借りしますね」

クロードさんの視線から逃れるべくバスルームへ入り込む。閉じた扉越しに、離れていくクロードさんの足音を聞いてホッと肩の力を抜いた。

「今から私は男」

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、女を捨てるマコトをお

許して下さい。って大げさですね。男の振りをするだけです。そちらに帰るまでの辛抱です。こちらで生きる為に、頑張って男を演じてみせましょう。

04・慣れとは恐ろしいもので

とりあえず熱めのシャワーを頭から浴びる。何となくではあるけれど、血行が良くなり頭の回転も速くなった気がする。うん、あくまでそんな気がするだけなのだが。

しかしこの短時間で考えねばならないことがある。風呂から出たら、私は男性の振りをしなくてはならない。これからずっと。ここで生活している間は。決して女性だと勘付かれてはならないのだ。今後男性の振りをするにあたり、注意しなくてはいけない点を考える。

「ぼ、僕……………うわぁーっ、駄目だっ！」

まず一人称を私から僕に変えてみようかと思った。手っ取り早く男性を演出する方法だ。と思ったのだが、シャワーを浴びている腕は鳥肌が立っている。ボクっ娘キャラじゃないのに、自分のことを僕と言うのは痛すぎる。居た堪れない。

「無理だ、無理。『私』のままでもいいっつ」

男性だって自分のことを私と言うし問題無いだろう。少々堅苦しく子供らしくも無い気もするが。そこは居候という身で謙虚に振舞っているとは誤魔化す方向で。

振る舞いは……………女性らしいと言われたことは無い。寧ろサトシに

は「もう少し女っぽくしろ」何て言われていたし。特に気をつける点はないのかもしれない。言っていて空しくなるが。

「後は……声か」

男性を意識して、多少低めに話した方が良いのだろうか？ しかし数日ならまだしも、ここでの生活が長くなる場合ボロが出そうだったならこのままの方が自然だろう。都合の良いことに子供と間違われているようだし、まだ声変わりしていないってことにしておけば何とかなりそうだ。

結論、何も変更点無し。……まっ、いいか。

風呂を終えルームウェアに袖を通す。子供用らしいがサイズはピッタリ。

ダイニングに向かう前に、今まで着ていた洋服を置きに二階の部屋に戻ると、既に布団が敷かれていた。クロードさんが敷いておいてくれたようだ。それは有難い。しかし布団の大きさに驚愕した。

「何これ。もしかこれが通常サイズ？ 軽く二人は寝られそうだし。足元すごく余るんだけど」

掛け布団をめくり、大の字に寝転がる。両手を広げてても布団からはみ出ることは無い。大は小を兼ねると言うが、これは良い。大きな布団を独り占め。贅沢な気分だ。それに普段はベッドを使っていたので、布団で寝るのは新鮮だ。どこか旅館にでも来た気分が味

わかる。

まあ、旅館……ただの旅行先であつたら良かったのだけれど。ここは異世界。

いつ帰れるのかは分からない。ただ救いなのは帰れる可能性がちゃんとあるということだ。そして帰れるまでの間、お世話になれる場所も見つけた。

「早く魔力の使い方、身につけないと」

魔力があることは分かった。分からないのはその使い方。それさえ分かれば私は元の世界に帰れる。お父さん、お母さん、サトシの所に帰れる。

だから、早く、早く……。

ふと目を開けると、部屋の明かりが消えていた。足元に避けておいた掛け布団が何故か肩まで掛けられている。

どうやら横になった後、寝てしまったようだ。いつまでもダイニングに現れない私を、クロードさんは気に掛け、ここまで来たに違いない。寝ている私を見て、電気を消して布団を掛けてくれたのだろう。

起こしてくれても良かったのに……。でもお蔭で体はすっきりした。自分が思っていた以上に、異世界渡りの負担が体にきていたのかもしれない。現にすつきりはしたけれども、まだ体は睡眠を欲している。夕飯を食べていないけれども、今は食欲よりも睡眠欲の方が勝っていた。

鞆の中に仕舞っておいた腕時計を手探りで取り出す。時計の脇のボタンを押すとバックライトが光り、現在の時刻が表示された。

「十一時過ぎているのか……。流石にクロードさん、寝ちゃっているかな」

そつと部屋の扉を開けると暗い廊下。階下を覗いて様子を窺うが、物音もしなければ明かりも漏れてはいない。やはりクロードさんは寝ているようだ。

勝手知つたる我が家……。ではないけれど、我が家と同じ間取りの家。廊下の明かりは点けずに、暗い中一階に下りる。

お腹は空いていないが、喉は渴いている。何か飲ませてもらおうとキッチンへ向かった。

勝手に人様の冷蔵庫を開けて、しかも飲み物頂戴するのは気が引けたが、でも冷たい物が飲みたい。たぶん冷蔵庫に入っている飲み物を飲んだぐらいだったら、クロードさんは怒らない気がする。そう思い冷蔵庫を開いたが、私が飲めそうな物は入っていないかった。入っていたのは、私が食べずに残った、ラップの掛かった惣菜。それにビール。

ビール飲んだら……。やっぱり怒られるよね。そもそも私未成年だし。こっちの世界の成人の年齢は知らないが、明らかに子供扱いされているのだから、アルコールは不味いだろう。

「仕方ない。水で我慢するか」

食器棚から出したグラスに水道水を注ぎ、それを煽る。それでもまだ乾きは癒えず、再度水を注いだ。今度はゆっくりと口を付ける。

冷蔵庫には残った惣菜が入っていたが、それが無ければビールだけ。男性の一人暮らしらしい冷蔵庫の中身……なのかもしれないが、普段どんな食生活をしているんだろう。

ぱっと見た感じ、最低限の調理器具は揃っているようだ。しかし普段それらは使われていないのかもしれない。

今まで料理は母親任せで、手伝う程度にしかやってきていなかった。正直得意分野ではない。でも全く出来ないという訳でもない。居候させてもらう身だし、ここは料理当番を買って出よう。せつかく揃っている調理器具、使わなければ勿体無い。それに毎日外食、店屋物、惣菜購入なんて贅沢はしてられない。所持金は余り残っていない身で、クロードさんに養ってもらうのだから、節約できるところは節約しないとだよな。

二杯目の水が空になったグラスを洗って、洗いカゴに伏せる。布巾が見当たらなかったので、そのままにさせてもらう。明日、布巾の場所も聞かないと。

布巾だけではない。この家で生活していく上で必要になることを聞かねばならない。

夕飯の時に聞ければ良かったのだけれど……。明日の朝、聞くのは難しいだろう。朝は忙しいのが相場だ。寝てしまったのが悔やまれる。でも体が休息を欲していたのは事実。今だって喉の渴きが落ち着いたら、眠気が襲ってきた。

早く部屋に戻る。

誰が見ている訳でもないのに、出た欠伸で開いた口を特に隠すこともせず。下りてきた時と同様、暗い階段を上る。

上りきった所にある扉に手を掛け部屋に入った。部屋の中は暗いけれども、暗くてもどこに何があるか分かってるから大丈夫。大丈夫……なはずなのに、途中何かにぶつかりながらベッドにダイブする。

……ん？ ベッド？

あれ？ と思ったけれども、睡魔には勝てずそのまま寝てしまった。そう、何かおかしいと思ったのに寝てしまったのだ。そして寝てしまったことを翌朝後悔した。

翌朝、私はクロードさんが敷いてくれた布団の上ではなく、ベッドの上に居た。「おはよう」と挨拶しているクロードさんの真横に。

そうだった。ここは私の部屋ではなく、クロードさんの部屋だったんだ。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは男の人と同じ布団で一夜を過ごしてしまいました。でも安心して下さい。不埒な行いは何もしていませんから。クロードさんが私の頭を撫でる手が、子供をあやすかのごとく優しいです。……こちらが空しくなるぐらいに。

05・ご主人様の正体

異世界へ来てから一週間が経った。

一週間経ったが、残念ながら魔力の使い方はまだ分からない。こればかりは人それぞれだから色々と試すしかなくろうと、クロードさんは『まりよくのつかいかた 100のほうほう』という本を私に与えてくれた。使い古した形跡の無いこの本は、私の為に買ってくれたようだ。有難い。有難いのだが……。本の隅に表記された対象年齢は2歳〜7歳。内容は全てひらがな。非常に空しい。魔力の練習は幼い内からされるそうだから、大人向けの本は逆に無いのかもしれない。そう頭では理解してもやはり空しい。

空しさはさておき、文字が難なく読める現状は助かっている。こちらの世界での文字……ひらがな、カタカナ、漢字、私が普段使っていたものと同じであった。魔力の使い方の前に、文字の習得から始めることになっていたら大変だったと思う。

お蔭で生活も全くとって良い程、苦が無い。一週間も過ごせば、家の中に何が何処にあるかも把握出来たし、生活面では全く問題が無い。あるとすれば、クロードさんと私の部屋を間違えそうになること。

クロードさんの部屋は、我が家では私の部屋。その習慣から、うつかり間違えそうになる。現にこちらに来た初日、クロードさんの部屋で寝てしまった。翌朝焦るわ気まずいわどう誤魔化そうかと思っただけ。クロードさんは「親が恋しかったのだろう」と頭を撫でてくれて……。そういうことにしておいてもらった。実年齢が知られたら猛烈に恥ずかしいけれども。

それよりも、寢床と一緒にして女だとバレなくて良かった。バレていたら、今こうしてここで生活出来ていない。女だと気付いてもえなかったことを少なからず悔しく思うけれど、やはりここはバレなくて良かった安心感の方が勝る。

こちらに來たときに身に付けていた下着……女性特有の下着は、クロードさんが出勤している際にこっそり洗って部屋干しして、今は鞆の一番底に見つからないように片付けてある。現在身につけている下着は男性物。多少抵抗はあったけれども今は慣れた。女性物に近いデザインの下着を選ばせてもらったことも大きい。

胸はさらしを巻くとか特別なことはせず、少し厚着をしているだけ。……それで誤魔化してしまう自分の体型が悲しい。とはいえ、夏の薄着になる季節だったら誤魔化しきれなかっただろう。……多分ね。今が夏でなくて良かったと思う。遅くても薄着になる夏までには元の世界に帰りたい。

ともかく、魔力の習得とは反比例して、こちらでの生活は順調だ。順調どころか……。

「マコトくん、おやつにしましょう」

「はい」

随分と楽な生活をさせてもらっている。居候なのに良いんだろうか、これで？

机におやつのクッキーと紅茶を並べてくれているのは、この家にお手伝いで来ているサラさん。私が来るまでは週に一回、この家に

来て掃除、洗濯等の家事をしていたそう。しかし私が居る今、週に三回、月曜、水曜、金曜に来てくれることになったらしい。

今日は金曜日、サラさんに会うのは三回目。毎回完璧に家事をこなして帰っていくので、私がやることはあまり残っていない。サラさんが来ない日の掃除、洗濯、食事の用意は、流石にやっているけれど。サラさんが掃除した翌日は、掃除する程の汚れは無く。洗濯も二人分しか無い洗濯量に、水がもったいないかな？ と、火曜日に一度洗濯機を借りたけれども、木曜日は使わなかった。よって私が畳む洗濯物も無い。食事はサラさんが作り置きをしておいてくれるので、私が料理する機会は殆ど無い。サラさんが料理している時に一緒に手伝わせてもらう程度だ。

家事って意外に時間を取られるから、サラさんが来てくれて、魔力の使い方の練習に専念出来るのは嬉しい。でも家政婦を雇えるなんて、クロードさんでいったい何者？ 別に家政婦が居る家が物凄く珍しい訳ではないけれど。我が家は勿論のこと、私の周り、友人の家で家政婦を雇っている所は無かった。家政婦を雇う家って、それなりに裕福な家ってイメージなんだよね。クロードさん、実はかなり稼いでいるとか、或いは実家が裕福なお坊ちゃんだとか？ そういえば私を拾おうとしたぐらいだ。それなりに金銭面で余裕があるのかもしれない。

……って、そういえば私、クロードさんのことを殆ど知らない。聞く機会はあったはずなのに、生活面のことばかり質問していて、すっかりクロードさんについては何も聞いていなかった。一週間お世話になっていて今更だけれど。

「ねえサラさん、クロードさんってヒューマンではないんですよね？」

「ええ、勿論」

ですよね。背は高いけれども、人とは変わらない容姿をしていたので念の為の確認。やはりヒューマンではない。

「じゃあ、獣人？」

サラさんは猫の獣人だそうで、ほぼヒューマンと容姿は変わらないが、耳だけは猫耳だ。非常に可愛い。サラさんが獣人なので、もしかしたらクロードさんもそうなのかな？　と思い聞いてみた質問だったのだが。サラさんは「もしかして聞いていなかったの？」と瞠目している。

「私から教えて差し上げても宜しいのだけれど。でも、もしかしたら一週間もお話にならなかったのは、お考えがあつてのことかもしれないですし……」

という訳で、直接聞いてみることにした。

私からクロードさんに質問するのは、大抵食事の時。クロードさんが「何か聞きたいことはないか？」と尋ねてくれるので質問がしやすいのだ。と言っても、この問いかけは一昨日からは無くなったのだけれど。

問いかけてもらえないのであれば、どのタイミングで聞けば良い

のだろう。あまり食事を邪魔したくもないし。それに何て質問しよう。

夕食の肉じゃがを口に運びながら、向かいに座るクロードさんをちらりと窺う。その私の視線に気付いたクロードさんが「何だ？」ときっかけを作ってくれた。

「えっと、クロードさんって何者ですか？」

クロードさんもだが、質問した私ですら一瞬固まる。確かに何者？とは思っていたが、ストレート過ぎて失礼な質問だ。

「サラリーマンだ。IT関係の仕事に就いている」

私の質問の仕方を気にしないとばかりに答えてはくれたが、聞きたいのは職業ではない。いや一応知ってはおきたかった事項だけだ。

「あの、そうじゃなくって。クロードさんて、ヒューマンでも獣人でもないんですね？」

その質問で私の意図を分かってくれたのか、クロードさんが一つ頷く。

「俺は……魔族だな」

「……魔族ですか」

「ああ」

「随分と大雑把ですね」

ここは元々魔族の世界。住んでいる殆どが魔族だ。サラさんだつて魔族。人間が少数居るけれど、本来の人間……魔族との混血ではない人間はごく僅かだ。ゼロとは言わないが、居ないと言っても良い程の人数らしい。

魔族との混血の人間で、人間の遺伝子を強く引継いだ子は人として扱われるが、こちらではヒューマンと呼ばれている。

最初こちらで言うヒューマンは、私の思う人間とイコールだと思っていた。しかしヒューマンは、人間の純血ではなく、魔族の血が混じっている人。人間は、魔族の血が混じらない純血の者を指すということをサラさんに教えてもらった。

サラさんと顔合わせの時、私はヒューマンとして紹介された。その時はヒューマンイコール人間だと思っていたから不思議に思わなかったけれども、サラさんから教えてもらった後では違う。私、正確には人間だよな？ と、そのことをクロードさんに話したら、人間は魔力を持っていない生き物だから、魔力を保持している私は、どこかで魔族の血が入っているヒューマンなのではないかという意見。例え人間だったとしても、この世界で人間は珍し過ぎるので、ヒューマンとして生活した方が都合が良いだろうということで、人間とは訂正せずにヒューマンとして過ごしている。

と、少々思考が脱線してしまったが、その間、クロードさんは口元に手をあてて悩んでいた。

「クロードさん？」

「確かにマコトが言う通り大雑把だな。しかし今まで考えたことが無かった」

まあ普通、考えるようなことではないよね。私の場合、自分が人間だってことは、考えずとも知っていることだし。

「誰も俺にそういう問いをする者はいなかったしな」

確かに。貴方は人間ですか？ 何て質問、したこともされたことも無い。私が居た元の世界では。

「マコト、君はどういったヒューマンなのかい？」

「えっ？」

質問していたのに、質問で返された！？ 突然の話の転換に驚く。

「私は……」

年齢は19歳。……だが今のところ秘密だ。こちらに来た初日の夜の失態を思い出せば、永遠に明かしたくない。

性別は女性。これも秘密だ。年齢以上に明かせない秘密だ。

って、自己紹介のメインどころで躓くと、先に進みにくいものだな。クロードさんの問いは、私の年齢や性別、血液型や誕生日とかそういうものを聞いているのではないと分かってはいるのだが。

「マコトが俺にした質問はそういったことなんだ。己を知るというのは意外に難しい」

うーん……。上手くはぐらかされたような。クロードさんは食事を再開してしまったので、この質問はここで終わりということなのだろう。私も皿に残っている肉じゃがを口に運び、食事を再開した。

私はどういった人間なのか……。次に同じ質問をされた時には答えられるようにしておこう。そうでないと、クロードさんのことを尋ねた時に、またはぐらかされてしまいそうだ。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトはどういった人間なんだろうね？ 今の内にきちんと自己分析しておくのも良いことですよね。就職活動で使えると思いますし。でもクロードさんみたいに大雑把な方でも、就職出来るようですよ。もしかしたらこちらの世界での就職活動は緩いのかもかもしれませんね。それは惹かれますが、就職活動する年齢までここに滞在するつもりはありませんから。また明日も、マコトは魔力使用の練習頑張ります。

06・腹八分目を希望

「ほらマコト、遠慮せずに食べなさい」

「遠慮していません。本当にお腹いっぱいです……」

「そんなことないだろ。育ち盛りなんだ。食べないと大きくなれないぞ」

いや成長期はとうに過ぎている。私の身長は高校二年の時に1ミリ伸びたつきり、それ以来伸びていない。これ以上食べれば成長するのは縦ではなく横にだ。それはごめんこうむりたい。

しかしクロードさんのこちらを氣遣うような視線に耐えきれず、「じゃあ、あと一切れだけ」と目の前のピザに手を伸ばした。

今日は土曜日。

今朝は、昨晚心の中で誓った、明日も魔力使用の練習を頑張ろうという言葉を実行すべく、いつもより少し早めに起きた。いつもより早い時間なのに、クロードさんは既に起きていて、なんと朝食の準備をしてくれていたのだ。

本来朝食の準備は私の仕事。今日はクロードさんは休日。そのせつかくの休日に早起きさせて朝食の準備をさせてしまったことを申し訳なく思い謝ると、もう少し大人を頼りなさいと恒例の子供扱い。しかも今日、明日は魔力の練習を休みなさいとお達しで、早起きしたにも関わらず一気に手持ち無沙汰になってしまった。

土曜日と日曜日、クロードさんが休日の日はサラさんは来ない。

そしてこの二日分の食事の作り置きは無い。そういう契約らしい。時間はたっぷりあるので、お昼は少し凝った物を作ろう。そう思いながら朝食を食べていたら、クロードさんに「お昼は宅配ピザを頼むつもりだから」と先手を打たれてしまった。

そして今に至る。

やはり最後の一切れは多かった。チーズで胸焼けしそうだ。

「クロードさん」

ピザが入っていた箱を片しているクロードさんに拳手し、発言の許可を求める。別にこんなことせず普通に会話しても構わないのだけれど、ここははっきり意思表示する為にこの形で。

クロードさんに先制される前に、夕飯は私が作る旨を主張しよう。夜はさっぱりした物が良い。冷蔵庫の中身と相談だ。

しかしクロードさんが「なんだ？」と問うのと同時に、玄関のチャイムが鳴った。

「すまない、マコト。来客だ。後で良いか？」

「あつ、はい」

クロードさんと来客とのインターホン越しの会話を窺う限り、相手は配達業者のようだ。クロードさんが玄関で荷物を受取りそれで終了かと思っただが、業者が二名、大きな箱を抱えてリビングに入っ

てきた。それをリビングに置くと、抱えていた箱を解体する。箱から出てきたのは平らな板、四本の同じ長さで少し太めの木の棒、そしてネジ等の部品諸々。それらを業者の二人が組み立てていく。

「……テーブル？」

「ああ。ソファーの前にあると便利かと思ってな」

確かにソファーで寛ぐ時に、飲み物とか置いて良いと思う。

組み立てた低めのテーブルをソファーの前に置くと、業者は箱を纏めて部屋から出ていく。これで終わりかと思いきや、新たな箱を抱えてリビングに入ってきた。

今度は何かと組み立てていく様子を窺う。どうやら棚らしい。ソファーから程好く離れた正面の壁際に置かれる棚。位置的にテレビ台になりそうだ。この家にテレビはないけれども。

棚の設置が終わると、クロードさんが業者に「宜しければ車の中で飲んで下さい」とペットボトルのお茶を手渡していたので、どうやら終了らしい。

クロードさんってば大きなお買い物をしたんだなあ……と業者を見送ると、彼等と入れ違いでまた新たな業者がやってきた。

「クロードさん、今度は何ですか？」

「ん？ まあ見れば分かるよ」

クロードさんが言う通り、見て直ぐに分かるものだった。業者が運んでいる箱にも絵が描かれていたし。物理的には先程の棚の方が大きい、金額的には今運ばれている物が一番大きな買い物だと思う。

リビングに運び込まれたのはテレビ。我が家のテレビよりも大画面。しかもこのテレビ一台で、DVD観賞や録画も可能らしい。我が家のテレビより高性能だ。……我が家に持って帰りたい。そんなことしないけれど。

配線や設定等全て終了させ、業者が帰ったリビングで、クロードさんがテレビのリモコンを扱う。ボタンを押す度に変わるチャンネル。どのチャンネルも綺麗に映っている。クロードさんも頷きながらテレビを見ているので、満足のいく買い物だったのだろう。

「マコトの世界でもテレビがあるんだろ？」

クロードさんの問いに頷く。

「今までテレビが無くて悪かったな。これからは好きな時に見て構わないから」

……何となく嫌な予感がする。

この家には今までテレビが無かったので当然だが、クロードさんはテレビを見る習慣が無い。でもこのタイミングで購入してきたの

は……。

私が居候しているから？ ……………なんてこと無いよね。流石に。それは考え過ぎ、自意識過剰だ。

「ケーブルテレビのアニメチャンネルを幾つか契約をしておいたから楽しむと良い」

見られる番組が子供仕様に偏っている気はするが……。テレビの購入は偶々私が居るタイミングと被っただけだ。……と思う。きっと、たぶん、恐らく。

……………このことについては深く考えないようにしよう。テレビ見られるようになって万歳！ 素直にそのことだけを喜んでおこう。でもこの一週間、クロードさんと過ごして気になったのは、クロードさんは私に対して過保護………というか甘やかし過ぎていると思う。私のことを幼い子供だと思っているからだとは思っけれど。実年齢を明かしていないのが非常に心苦しい。

とはいえ、年齢は明かすことなく帰りたいと思っているのも実情。

「マコト、嬉しいかい？」

「はい。見るのが楽しみです」

「じゃあ、早速見よう。どのチャンネルが良いかな」

渡された番組表を見ながら心の中で唸る。契約済みチャンネル内

で、特に見たいと思う番組が無い。普段アニメを見ないので、番組表に記されたタイトルからだけではさっぱり分からない。そもそも私の世界と同じ番組を放送しているとは考えにくいので、私がアニメオタクだったとしても、知っているタイトルは無いのかもしれないけれど。

あつ、でも意外に同じ番組が放送されていたりするのかな？

こちらに初めて来た日に、クロードさんから手渡された男児の下着。それにプリントされていたキャラクターは、私の世界でも存在しているキャラクターだったし。それに、未契約のチャンネルの番組をちらりと見ると、私でも知っている番組タイトルがちらほら。……というか、寧ろ未契約のチャンネルが非常に気になる。そつちを見たい。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、時代劇専門チャンネルを契約して欲しいだなんて、我俚言っちゃ駄目ですよ。そうですね。そうですね。分かっています。私、居候の身ですもの。クロードさんが契約してくれたアニメチャンネルだって、私の為だということ分かっています。アニメ、見ようじゃないですか。そういえばサトシ、ロボットが出てくるアニメが好きだったよね？これを機会にお姉ちゃんもロボットアニメに詳しくなるから、帰ったら一緒に見ようね。

07・せめて腹九分目で

出そうになる欠伸を奥歯を噛み締めて耐える。瞬きを繰り返して眠気を飛ばそうと試みるが、閉じた瞬間にブラックアウトしかけ、ハツとした。……今、船を漕いでしまったのではなかるうか？

今、私は猛烈に眠い。

クロードさんと早速テレビを見ることになり、何を見たいかと問われ、サトシが好きそうなロボットアニメを見ることにした。と言っても、私はさっぱりアニメタイトルが分からなかったので、「ロボットが出るアニメが見たい」旨だけをクロードさんに伝え、彼に選んでもらった。丁度5話連続放送のロボットアニメが放送されており、それを見ることに。

1話30分。それが5話。興味が持てる話だったらあつという間の連続5話なのだろうが、残念なことに私好みでは無かった。カタカナの名前が多すぎてついていけない。人の名前なのか、地域の名前なのか、ロボットの名前なのか、武器の名前なのか……。1話目まではしっかり起きて見ていたものの、2話目辺りから記憶が危うい。人間関係とかは面白そうなのだけれど、続きが気になるよりも睡魔の方が勝ってきてしまった。

その睡魔と闘っているのだが、なかなか退散してはくれない。

何しろこの状況が良くない。

満腹以上に満たされたお腹。食後は眠くなりやすいというのに、お昼にあれだけいっぱい食べたのだ。睡魔が訪れて当然。

そして私は現在心地良い温もりに包まれている。これで眠くなるなど言うのは酷だ。

お尻も背中も心地良い温もりを感じるこの状況。何故か私はクロードさんの膝の上。どれだけ子供扱いなの、クロードさん！と文句を言いかけた。が、実年齢を明かしていない身。それにクロードさんが、会社で子供の居る社員に、休日の子供との過ごし方を教えてもらったとかで実行する気満々。ソファに座ったクロードさんが、膝をポンポンと叩き、「さあ、マコトおいで」と満面の笑みで言われてしまったら……断れなかった。

我が家は家族仲が良い方だと思うが、父親の膝の上でテレビを見たのって、幼稚園の年少ぐらいまでだ。クロードさんに子供扱いされているとは言え、そこまで幼く見られているとは思っていないかったのだが……。どうしよう、3歳ぐらいの子供に見られていたら。流石にそんなことないよね？

眠気を誤魔化す為に、テーブル上のジュースに手を伸ばす。それをクロードさんが気付き、ジュースを手渡してくれる。そして私が飲み終わったの見計らってそのグラスをテーブルへと戻してくれた。

ジュースを飲んで多少は眠気が紛れたけれども、この方法は何度も使えない。こう甲斐甲斐しく動かれてしまうと、申し訳なくてジュースもろくに飲めないのだ。

「マコト、飽きたか？」

素直に答えるか迷う。ロボットアニメを見たいと言ったのは私だ。言い出しておいて飽きたは失礼な気がして、首を横に振る。それに対しクロードさんは「そうか」と呟き、私の頭を撫でてくれた。

撫でる手が優しい。それ故に更なる睡魔に襲われる。その眠気が

心地良過ぎて抗う気を削がれた。

お父さんの手とも、お母さんの手とも、サトシの手とも違う手。クロードさんとはまだ一週間しか一緒に過ごしていない。クロードさんについてはまだ知らないことが多い。それでも、この手は信用して大丈夫だと、そう思えるだけの何かがある。一週間、短いようで、それでもクロードさんの人となりを知るだけの時間を、共に過ごしているということなのだろう。

優しくて、とても安心出来る手だ。

その手に軽く頭を委ね、重くなった目蓋をゆっくり閉じた。

睡魔に負けた私が目を覚ました時には、テレビの音は消えていた。そして視界も寝る前とは違っていた。それもそのはず。眠る前と体勢が違う。私はクロードさんの膝の上に座っていたはずだ。テレビを見ながら寝てしまったのだから、本来なら見えるのはテレビ。或いは首を落として自分の膝辺り。間違ってもクロードさんの顔が見える体勢では無かったはずなのだ。

しかしクロードさんとはびっくり目が合ってしまった。クロードさんは私を見下ろしている。座っていたはずのクロードさんの膝の上には……………あ、れ？ 私の頭？

「じ、ごめんなさいっ」

これって膝枕じゃん！ と慌てて起き上がろうとしたところを、「急に動いたら良くない」と制される。一度はクロードさんから離

れた頭が再びクロードさんの膝の上に戻った。

クロードさんの手がまた優しく私の頭を往復する。その動きを邪魔しない様に、視線だけ動かし窓を見遣ると、カーテンを閉じていない窓の向こうは既に暗い。30分程度の転寝だと思ったが、どうやら予想以上に寝ていたようだ。

「疲れていたんだな」

「えっ？」

「マコト、早く家に帰りたい気持ちは分かる。だが無理は良くないよ。慣れない内の魔力の練習は、自分が思っているよりも体力を消耗するんだ。少し練習を減らしなさい」

無理をしているつもりは無い。寧ろもっと練習を頑張ろうと思っていたのに。その私の不服を感じ取ったのだろう。苦笑と共に頬を撫でられた。

「体が万全で無ければ、使えるであろう魔力が発動しないこともある。それでは練習が無駄になるだろ？」

そうもつともなことを言われてしまえば頷くしかない。

「よし。じゃあ夕飯にするか」

もうそんな時間なのかと驚き、起き上がって時計を確認すると7時になるうとしていた。

「ごめんなさい。今から食事の準備します」

とは言えどうしよう。夕飯を何にするか全く考えていなかった。昼が重かったから、軽めのものにしようというイメージだけで、冷蔵庫に残っている物の確認もしていない。

「ああ、それなら問題ない。出前が届いているから」

「へ？」

クロードさんが指差す方、ダイニングテーブルには出前らしき器が並べられている。漆塗りのような黒い器。見覚えのある器には予想通りの物が入っていた。

「お寿司！」

「夜はさっぱりした物が良いと思ってな。マコト、寿司は大丈夫か？」

「はい、勿論」

今日は三食全て準備しなかったことを申し訳なく思う。だけれど、夕食のチョイスは、クロードさんナイスだ！

……………しかし。

「あの、クロードさん。これ何人前ですか？」

「何人前とは書いていなかったと思うが」

「そんなことないと思うんですけど」

机に置かれたままの、注文表を手に取り確認する。そこには小さく『5人前』の文字。

「えっと、クロードさん……………」

「マコトは育ち盛りだから、これぐらい軽く入るだろ？」

ああ…………。お父さん、お母さん、サトシ、マコトはそちらに帰る頃には今より肥えていそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4972w/>

たぶん異世界トリップ

2011年10月5日21時22分発行